

浄土

新年號

浄土

鈴木大拙

佛教の變革

宇野圓空

暮れから春へ

吉田絃二郎

浄土教の本質

眞野正順

一九四九年元旦

謹賀新年

法然上人鑽仰會

目次

浄土	鈴木大拙(2)
暮れから春へ	吉田絃二郎(4)
賭	佐藤賢順(15)
いかに佛教は變革するか	宇野圓空(7)
新たなる自覺	大野法道(18)
双六と佛教	ふじたひろし(11)
正月つれづれ	竹中信常(22)
かるた談義	寺尾 讓(20)
浄土教の本質	眞野正順(12)

年　頭　言

「宗教は、貧民にとつては、快活以外のものであつてはなるまい」

フランス近代の劇作家、ジュール・ルナアルは彼の日記の中の一節で、こう書いている。

心から念佛をとなえるものは、何人によらず淨土に往つて生れることを約束した、法然上人のおしえは、明日の完全な幸福を子供等に約束した父の言葉のように、われわれにとつて限りない喜びである。ひとたびこれを信じさえすれば、人は子供のように快活であり得る。

法然上人のおしえに、もしかりにむづかしい理窟がないにしても、又、よしそれがあつたにしても、この快活がありさえすれば、立派な宗教なのである。ルナアルによれば、快活以外のものでないところが、ありがたいのである。

「別の子細さうらはす……この外におくふかきことを存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候ふべし……」

上人が一枚起請文にこうしるされた時には、まさしく理解よりは信仰を、會得よりは信順をのぞまれていたのである。鋭いまなこを以つて世相をみておられ上人は、ものの本末をはつきりとみとられ、信仰あるものにかたい約束をして下されたのである。禍いは早く双葉のうちに摘みとつておかねばならぬ。人ははじめ分厘のくいちがいに心づかず、後にそれがひろがつて越すに越せぬ巨溝となつて、はじめて己れの過ちを悔いるものである。

上人の、父のような慈愛と、さきさきまでわれわれのことに氣をくばつて下さる大きな心とを、年頭と共に再想してみたい。



淨土

文學博士 鈴木大拙

娑婆即寂光土と云ふことがあるが、これがよく誤つて解せられて居る。

娑婆はどこまでも娑婆で決して淨土ではない。淨土はまた淨土で決して娑婆ではない。これはいつも判然させておかななくてはならぬ。山は山で川ではない、柳は緑で花は紅である。これが差別の相だ。差別なくては此世はない従つて吾等の生命と云ふものもない。生命のある限り自他はある。娑婆はここで淨土はかなたである。

しかも娑婆即寂光土になる時節がある。この時節に會つたことの無いものが、そのやうなことを云ふと、その人は地獄に墮ちること箭の如しである。

指方立相は方便説だと云へば、さうでもあり、またさうでもない。西方は東方でもあり、また北方でもある。十萬億土は海をわたり山を越えて限り知れぬ彼方に在るが、また此處を離れぬとも云へる。一人が正覺を成ずると九族天に上ると話されるやうに、彌陀の正覺は一切衆生の正覺である。従つて我一人の正覺はまた彌陀の正覺を證し、またやがて一切衆生の正覺を證する



この立場からすると、十萬億土は直ちにこの自分の立處を一步も離れて居ない。西方淨土はわがこの書齋そのものでなくてはならぬ。分別智の上から見る時は、何事も方便でないものはない。娑婆即寂光土も亦方便である。指方立相と擇ぶところはない。彌陀もまた方便世界の一人である。

併しながらこれは『其人』に對して言ふべきことである。一步を誤れば危険千萬だ。それで宿善のものでないと歎異抄のやうな書物は讀んではならぬと云はれる。安心決定抄でもその通りである。

それで法然上人は

月かげの到らぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

と歌ふのである。淨土の月の光りは此娑婆を徹して照らして居る。我等と衆生と皆共に其光に包まれてさへ居る。しかしこれを領得する人は少ない。その光を認得する人は稀である。認得さへ出来れば、淨土の蓮華は此胸の中に咲き出る。これが『ながむる人の心にぞすむ』である。

キリストはよく『耳あるものはきけ』とか『目あるものは見よ』とか云ふ吾等は何れも耳をもち目をもつて居るのであるが、淨土での迦陵頻伽の聲がきこえぬ、無量壽佛の光明威神の巍巍たるものを見ることが出来ぬ。肉眼が天眼に肉耳が天耳にかはらぬといけないうちに思ふか知らぬが『自然虚無の身』を認得さへすれば、清淨・離欲・寂滅・眞實である。何でも聞える、何でも見える。

淨土は往生するところではなくて見得する境地である。



暮れから春へ

吉田 絃 二 郎

伊豆の山の上の、妻の墓のまはりには龍膽が咲いてゐた。妻は死んだら静かな山の中に眠りたいといつてゐたので、伊豆の赤松山の上に、塋域を選ぶことにした。墓の石も桂川から石を拾うて山の上まで運んだものである。

温泉町の人たちの墓地から少し離れて、こんもりと繁つた赤松山の上にたゞ一基塚を立てたが、獨りでは寂しさうなので、妻の母のために自然石を探して小ひさな墓を並べた。

その赤松山には或る時は鷹が雛を育て、瑠璃鳥や郭公が鳴き、秋のころはよく啄木鳥の木をつゝく音を聞いた。今度數年振りで山の上に登つて見たら、赤松はほとんど伐り倒され、芝山の上に妻の墓だけがぽつんと、孤寂な姿を現はしてゐた。それでも斧を免れた赤松がたゞ一本墓を守るやうに残つてゐるのが、さび果てた松籟を聴かせてゐた。

墓の前は切り拓かれて畑になつてゐた。さらに二

三丁も山を登つたところの畑までは猪がやつて來るといふ話であつた。芝の烏森で生まれ、日本橋横山町で、比較的花やかな家庭に育つた妻が、猪に見舞はれるやうな山の上に眠つてゐるのだと思ふと、ふびんなやうな氣もするのであつた。

桂川に沿うた宿の二階の部屋からは、墓のある山も見え、墓の一本の赤松も見えるので、時雨する日など、わたくしは時雨に濡れてゐる山上の墓を想ふては山を眺むることもあつた。或る時は霜を呼ぶ寒夜、八日ごろの月が墓の山の端に懸かるのを見て愁然たることもあつた。すでに捨てられた山上の灰と思ふ人もあらうが、なかなか人間の情といふものは諦めがたいものがある。

今度修善寺に行つて見たら、久し振りで修禪寺の鐘の音を聴くことができた。戦時に供出したきりで

還り來ぬ鐘を數いてゐた町の人たちのよろこびも察せられる。こゝの町は桂川の清流の中に挿んで、幾つかの谷々や、山々に抱かれてゐるので、修禪寺の鐘は山から谷に、谷から山へと、こだまして響き、その音は幽玄を極めて、縹渺たるものである。芭蕉翁には「草臥れて宿かるころを藤の花」といふ句があるが、東海道線三島から小ひさな電車に揺られ草臥れ果てた身を修善の宿に托し得た黄昏れ頃、靜かに響き寄る修禪寺の鐘の聲を聴けば肅然たるものゝ裡にいつぺんの郷愁胸をそゝるものがある。芭蕉翁に倣ひて「草臥れて宿かるころや鐘の聲」とうたひたい氣もする。

こゝの町を流れてゐる桂川は美しい溪川であるが流れの音もさまで大きくもない。かつて或る旅人は「川の音が耳について眠れなかつた」と言つてゐたことがある。わたくしの部屋は桂川の流れに臨んで作られた室であり、北方の窓を開けば、直ぐに黝い岩塊に奔る桂川の流れに接することができ、徹宵、岩を搏つ川瀬の音を聴くことができる。しかしわたくしは涼々たる川瀬の音にむしろ懐かしい搖籃の歌を感ずる。溪川の音にわが一心を托すれば、川の音はかへつて、柔かにわが夢をつゝむ。

倉の白い壁に柚子の實が黄色に映つてゐる。ありがたい年の暮れである。庭の隅に萬年青の實が眞紅な色を見せてゐる。ありがたい年の暮れである。墓に手向けられた寒菊がそこはかの寂しみをこめて薫つてゐる。これも年の暮れの尊さである。

若いころはたゞ年を取るのが、寂しくて、年の暮れの尊さを知ることができなかつた。人は或る年齢に達すれば自然に一つ一つ齡を重ねることを寂しいと思ふと同時にありがたいと思ひ、尊くも思ふやうにもなる。この淡々乎たる寂しみの中の悟りは凡夫にゆるされた唯一の涅槃でもあらう。

わたくしには子供もなし、妻もないが、それでもやはり生きてゐらるる間は生きて行きたいと思ふ。手も足も年々に不自由になり、行く末のことを思ふと悄然たるものがあるが、一切はあなたまかせである。よく、「あなたは寂しいでせう」とわたくしに問ふ人がある。實際は寂しいなどといふ言葉では言ひ盡せないほど寂しい。しかし生きてゐて古人の書を讀み、親しい人たちとたまたま逢ふことは楽しみである。人に介けられながらも、このほど四年振りで東京驛のプラットフォームに、立つた時は、まるで遠足に行く子供のやうに嬉しかつた。そこには一人の知人も親しいいきやうだいもないが、人の群とい

つしよに生きてゐるといふことだけで自分の心には明るいものが湧く。もし人間が死ななければならぬ時が來たら、どんな孤獨な人でも涙を流すにちがひない。現世は穢土といはれるが、かつてはわが父母を生み、われわれを生み、わが愛する人たちを生んでくれた世界である。なつかしい世界である。煩惱のうれしさと苦しさを味はせてくれた世界である。別るゝ時は涙なきを得ないであらう。

國敗れて山河ありといふが、春が來れば殊に祖國の春のうれしさを思ふ。若水を掬み、屠蘇を祝へば庭にはすでに早咲きの梅が薫り、鶯が篋鳴きをしてゐる。砂土の壁、三尺の床框、淡々たる墨畫一軸、水仙の花二三輪、香を焚き合掌して春を迎へるに充分である。さらに一碗の抹茶、一顆の甘味あれば王侯の贅に勝ることを感ずる。新らしい春を迎へるごとに東洋的な物の考へ方、物の感じ方のよさをしみじみと感ずる。

寺々の除夜の鐘を聴く時、その東洋的な幽玄な哲學と宗教の尊さを思ひ、若水掬む音に活潑刺たる生命の清新無限さを想ふ。合掌して梅花を拜し、祖國の山々を望む。

日本禮讚

世界有數の英國生理學者、ランスロット・ホグベンという人の著書「アーサー・イン・トランシット」は第二次大戦のさなかに出版されたものだが、その中で、わざわざ一章を設けて氏の日本觀が描かれている。

學者らしい率直さで、まず、日本に行つてみる迄は日本が嫌いだったといつてゐる。ところが船の都合でやむなく日本に寄港し、ふとしたことから、日本に十七世紀の昔からすでに高等數學の公式を編み出した人——關新助——がいたことを知り、これが機縁で日本のことを色々研究した結果、日本にも色々と感心すべき點のあることが分つたとのことである。

戦争のさいちうに、敵國のことをほめて下れる度量に感謝すると共は、そのような機縁を作つて置いてくれた、われわれの先祖の偉業に心をいたすべきではなからうか。

筆者紹介

鈴木大拙氏 學士院會員 文學博士

宇野圓空氏 衆議院文教委員會顧問、元東大教授、文學博士

大野法道氏 大正大學教授 文學博士

いかに佛教は變革するか

文學博士

宇野圓空

◎

長い歴史をもつ力づよい傳統の重壓下に、自分で身動きのとれなくなつてゐる今の佛教、それを近代化した人類社會のうちに解放して、新しく構成される世界文化の一基底たらしめようとする内外の聲は、たしかに現代生活の世界的混迷にかへりみて無理のない要求であらう。ところが、その佛教の近代化はどういふ點で行はれるべきか、またその目標や方法は如何といふことになるか、そこには多くの異つた意見の對立もあり、その實現に多くの困難もある。

◎

(7) 一體、一と口に佛教といつても、各宗各派の數多い宗門的特殊性があるばかりでなく、その信仰の面、行規の

面、寺院や宗團の組織と活動など、多面的な現象形態を包括してゐる。そしてこれらの何れを主として取あげるかによつて、佛教の革新とか更生とかいふ問題も、いろいろ異つた内容をもつことになる。

これまで比較的多くの人が佛教に對して要求するのはその説教の仕方や讀經等の儀式、殿堂の設備などを、もつと現代的な形式に切かえろといふことであつた。これらは佛教の外面的な形式として誰の目にもつきやすく、その宗教的保守性による傳統的要素がすでに時代おくれとなり、今の人々の生活にびつたり來ないからである。しかしこれらの儀式や集會の目的は、自己の宗教的感激を新たにし、またそれを人々に傳へる教化にあるにせよ本來それは内的な宗教的經驗の表現形態なのであるから佛教の生命にとつては、むしろ末梢的な要素であり、この外形を新たに力づけるには、その内面的信仰の充實に

またねばならない。ことに讀經や説教の類はその形式と同時に内容の改變も問題となるので、それが信仰の觀念的形態としての教義の再吟味とも關係して來ることは自然の勢である。

◎

他方でまた、現在の佛教のあまりに數多い分派を統合し、小宗派の勢力を一つに結集して、大きな集團的勢力として佛教の興隆をはかろうといふ希望も、可なり多くの人に關心をもたれてゐる。實際、佛教各派の分立は我國において歴史上偶然的なものが多く、政治その他の俗權との關係から生れた宗派も少くないので、今の時代にこれらが各自の傳統に因執して對立抗爭してゐる實狀はまつたく宗教的に無意味であり、佛教本來の精神にも忠實なる所以ではない。ことに各宗門の内部組織としての本末寺院の制度や、その信徒を結成する檀家制度の如きものは、それが依存して來た封建社會の基盤が失はれた今日、その存続は無意味でもあり不可能でもある。しかし宗教的集團としてはその本質上、團體や個人の分合出入には、信仰の一致といふことが第一原理なのであるから、佛教に於ける宗派的對立や分裂をさけ、さらに既成宗團の統合が時代的に重要だとすれば、それには信仰、特にその思想的構成の統一整備が先決問題となる。しか

もそれが明治以來屢々提唱された「通佛教」といつたやうな、たゞ各宗の共通教義だけを抜きだしてつなぎ合せたものであつては、單に外形の統合はできても、それが宗教的生命をもつて活動することは望まれない。こゝに新たな佛教としては集團的にもその生命ある中心原理としての信仰と行規の創造的發展が前提となるべき理由がある。

◎

そこでこの佛教信仰の思想的及び行動的中核を形成するのに、まづその消極的な手續としては、通俗的な佛教信仰や民間行事の類を相當に精算してかゝらねばなるまい。なぜなら今どき佛教とよばれて流布してゐるものの中には、きわめて低級な俗信も多分にまじつていて、時としては随分いかゞわしい迷信さへも佛教の名で行はれていることが多いからである。このことは蒙古や西藏や南方諸國における佛教の實狀をみても否定できず、手近には支那でも我國でも佛教徒の生活の大部分がどんな程度のものであるかを省みたら明かである。

これらの俗信は、本來佛教が弘まるにつれてその土地や住民の間に以前から行はれてゐたのが、佛教としての生活のうちに取入れられたものが多く、中にはそれを佛教風に説明しかえて教義體系に織込んだものもある。そ

して多くの場合これらは應病與藥の方便として意味づけられてもいるので、長い目でみて大衆の宗教的水準を漸次に高めてゆく教育的立場からは、ある程度までは認されるでもあろう。しかしかやうな新信仰の包容がその度をこえて、佛教本來の原理的なものがその中に埋没してしまい、低俗な信仰との妥協のために佛教の特質が失却されては、たとい多數の人口を包括しての外面的勢力がいかん盛んになつても、もはや佛教の存在は質的に消滅して終ふであらう。

このやうに佛教があらゆる宗教形態を無差別に吸収する傾向は、普通にその「包容性」によるといはれ、思想的には一切を無自性空と觀じつゝ、しかもすべてを有りのまゝに假としてみとめる論理的性格にもとづくのであらう。そして他面歴史的には佛教教團が最初から出家の行者と在家の信者とを異質的に包括した二重教團として後者の人たちの信仰や行規には、第二義的ないはゆる俗諦の法を適用して、教育的にきわめて寛容な態度をもつてのぞんだことに由來する。しかし近代意識はもはやこのやうな曖昧な包容や雜糅をみとめ得ないのであつて、佛教の現状はこゝに全體として再批判され、その本質的な原理は今の混沌からはつきりと擇び出さねばならないのである。

◎

ところでこの佛教の現状と歴史に對する再批判、その雜然たる混沌状態からの再整備は、どんな方向に、また如何なる方法でなさるべきであらうか。それは、一つは低俗な信仰から佛教の根本理想を解放することであると同時に、さらに、積極的に、その本質的な宗教性の近代的意義を明確にし、それにもとづく宗教的生活の水準を知的にも行的にも、定めてゆくことである。

この佛教に本質的な宗教的理想が何であるかを、正確に決定するには、まづそれを歴史的發展の過程にそうて検討し、その出立點である根本佛教がいかなる宗教的動機によつて發足したかを、深く考慮すべきである。これは諸宗派の統合原理を求めるといふ意圖からも、「釋尊に歸れ」といふ呼聲と共に、明治以來、根本佛教の新たな研究がすすんで、釋尊に於ける眞實の宗教的生活の意味が、よほど明かになつてきた。それは一言にしていえば無我の自覺と行道とによる生死解脱の法であり、運命的な矛盾と苦惱の中にある人間の徹底的解放の道である。その後、小乗諸派はもとより、大乘佛教にいたるまで、これを理論化することに努力し、またその實修方法を色々と工夫してゐる間に、往々その本來の意義目的が逸せられる危険があつた。しかし、正當な範圍での佛教全體

の發展過程を通じて、苦の解脱を生死の一大事として、我執の克服、放棄に血みどろの苦闘をつづけて來たところに、佛教を一貫した宗教的生命があつたといえないであらうか。

そのやうな宗教的理想は、より多く一般的には、菩提涅槃、轉迷開悟などいはれるように、多少主知的な内容をもつてゐることは疑はれないので、そこにまた、佛教のもつ一つの宗教的特徴もあるわけである。だが、佛教的知性は轉識得智という表現がしめすように、人間の理性を超え、我執を根抵にもつ分別智の放棄を意味するのみならず、これを生活形態の中に具現する、戒・定等の實修にも重點が置かれたのである。そして人が一度己れをすて切つて、自力的にか、他力的にか、自己爆破を遂げた時に、全く他なる世界に生れ出ることが、覺證といふ往生ともよばれる佛教の大きな宗教的轉換なのであらう。

◎

かような佛教に特殊な宗教性は、近年わが學界でも多少哲學的に評價もされ、基礎づけられてゐる。しかもそれが單に舊來の教義の近代的な解釋や、用語の改修などに終つてはならず、そこには、過去の判釋と同時に、將來に向つての進展が考えらるべきである。

一般に人間の自覺がすすむにつれて、その悩みは深刻になり、その宗教的要求が高まるほど、己れを放棄しての轉換が困難になる。この世界的に激化する人類の共悩ととりくんで、佛教は果して現代の人々の強靱な自我を粉碎して眞に生死を解脱させ得るであらうか。各人はもとより、社會も、人生のすべてが内に包藏してゐる矛盾と、それから來るあらゆる苦惱とを、簡單に一解決したり「脱却」したりすることは、佛教としては教えてゐないはずである。それにしても、この矛盾や苦惱をそのまま身に引うけて、その中に自ら死んで、次に來るものを生かすより外に眞實の道がないとすれば、今後に向つて、佛教自體の抱いてゐる使命も悲壯そのものであることを覺悟しなければならぬ。

説き手は解つたか

明治佛教界を通じて徳望第一の稱があつた福田行誠老師には超脱洒々たる風韻をつたえる話が少くない。ある時上野の惠澄和尚の門に入り、天台學に造詣の深い居士神原精二が神戸の明道協會で講演した。講堂を出る精二をみつけた老師は早速一矢を放つた。

「どうだね、聽衆は解つた様子かね」、精二、さも得意そうに「どうも解らぬ様です」と云へば老師「説き手は解つたかね」

これこそ五十三次を居ながら歩む膝栗毛、馬はいい、道中双六、南無分身諸佛と書いた六字を六角に刻む櫻木花の都を眞中に――

と、近松門左の丹波與作待宵小室節にみえてゐる道中双六は、東海道五十三次を題材としたものである。

子供も大人も、正月の遊びとして賽の目一つで轉がり興じる繪双六は、遡つて見ると、仲々佛教に縁がふかい。ひとつ「佛教と双六」の振り出しから出かけてみることにしよう。

大體、双六という言葉だが、之は朝鮮語のサゴロクから訛つたというから、大陸傳來のものであること疑いない。そして仲々子供の遊びどころではなく、賽賭博の雄をなしてこの東海の國に流行したという。日本書紀をみると、双六を禁斷す、といったいかめしい文字が見えるから、之は大人の世界で先ず大いに射倖心をそゝつたものらしい。

小野宮は、昔惟高のみこの双六の質にとり給える所なり

などと古今集にあるところからすると、その賭も一寸やそつとの程度ではおさまらなかつたのもあるわけだ。けれども、こおした奈良

平安時代にみえる双六は、いま風の繪双六とは違つて盤を使つて二個の賽を筒からふり出して争う盤六というものである。

それが鎌倉時代になると、紙双六が現われる。しかもその始めは佛法双六、又の名を名目双六とよび、佛教的要素を織りこんだものである。例えば上の方に法身、中央の左右に



報身とか應身下の方に無間地獄とある様に配置されている。これに使う賽は、いまの様な一・六數字でなく、六面に南無分身諸佛と六字が配してある。南の字が出たら修羅へゆく無の字が出たら仙人へなど、進み方はいわゆる飛び双六である。無間地獄へおつこちると、遊びから除かれるといったわけである。

この双六をやつて遊び乍ら小僧さん達は、むづかしい佛教用語―名目をおぼえるという仲々昔の僧團も氣のきいたことを考えたもの「名目双六も知らぬ奴」というのは、だから「未學の僧を罵る詞」だつたという。

ところでどうも、こんな難しい佛教用語ばかりでは、勉強には好いかも知れぬが、遊びということから考えると些か曲がない。面白さを望む心は、繪を加えるようになる。江戸時代になると、繪双六が現われて来る。それも始めは、名目双六の系譜をとび越えてしまえないで、淨土双六とよばれて内容的にはまだ佛教要素を中心としている。

願うこそ只極樂の花の縁
永きひねもす打つ繪双六

といった句があるように、淨土双六では、上りは當然、極樂淨土というわけである。

しかし一度、繪双六へ轉化すると、江戸時代の民衆は、あの自分達の文化、庶民好樂のさまざまな藝文の世界を拓いた才能をもつて双六を自分たちの生活の中にくりひろげて行つた。もう佛教的内容は双六から消え失せてゆく。繪双六は東海道五十三次を歩き廻るとともに、様々の形態をとつて、全國へととび出して行つたのである(ふぢた)。

淨土教の本質

——信仰のさまたげ——

・眞野正順

淨土の教は、佛教の中でも一番平易な教であるが、さてこれを信ずるとなると意外に入りにくい教である。さまざまの躓きの石がそこにある。

一つには、淨土教は、あまりにも年久しくこの國の習俗と共にあつたために、また特に、近世徳川期において沈滞をきわめたために、次第にその本質から退化して、民族の幼稚な原始的習俗信仰へと墮落して行つてしまつておる。

たとへば、淨土といへば、すぐあの畫にかいたやうな「地獄極樂」が目に見え、人は死ぬと、そこで、蛆虫のごとく赤鬼の鋒にかけられたり、蓮の葉の上をはいまわつたりする物語を説く教のやうに感ぜられる。また念佛といへば、死者の前でとなへる禁厭か呪言のやうに氣味悪く感ぜられる。これらはすべて、淨土の教がその本質から退化して、

この國の民族が往昔もつてゐた原始的信仰たる黄泉國や、死靈呪言に還元していつた姿を示すに外ならない。このやうな事は、世界の宗教の歴史には珍らしい事ではなく、一つの宗教が、その正しき理解を怠るときには、いつも、この原始自然習俗への退化が現はれてくるのである。

しかし、この退化した淨土教のすがたは、案外にひろく一般に流布し、深く我々の頭の中に滲けこんでしまつておるから、いま急に、この教に入つて行かうとすると、この感情とたゞかふために、意外に多くの勇氣を必要とするのである。

二つには、科學と矛盾するのではないか、といふ疑惧である。尤も、宗教はたゞちに科學と矛盾すると云ひ張るのは、十九世紀の唯物論者であつて、決して科學そのもので

はない。この事は、むしろ科學に素人なる唯物論者たちに聞くよりも、科學の代表者たる、相對性原理のアインシュタインや、量子論のプランク等の著述にたづねたがよい。この方が最も正確である。そこでは、兩者は矛盾するところか、眞の科學的探求のためには宗教的精神を必須とする所以が確信を以て斷言されてゐるのを發見するであらう。

しかし、とにかく、この問題を正しく解決するためには我々は科學的世界觀と宗教觀との關係といふ廣汎な問題に入つてゆかねばならぬ。我々はいづれ別の機會に、あらためて是れを論ずる時があると思ふが、たゞ今の場合、科學との間に感ぜられつゝある矛盾も、實は先にのべた一般に流布せる原始民俗的に退化せる淨土教の形態をとりあげ、これと科學との矛盾を考へてゐる場合の多いのに注意しておきたい。したがつて、眞に淨土教の本質を解明する方が先決問題である。それによつて、恐らく一般にいだかれつつある科學的疑惑の大部分はおそらく消散するであらう。第三はむしろ佛教の内部において懷かれつゝある疑惑であつて、前にくらべると、遙かに淨土教の本質にふれた問題である。

これは主として禪宗系の學者および原始佛教を主とする

佛教研究者の多くいさぐ考であつて、その考によると、淨土教は眞の佛教ではない。それは佛教の傍流と云はれるかも知れないが決して正流ではない、といふのである。即ち釋尊の佛教は本來無神論である。架空的な神などに依らず、すべて曇らざるわが理知を以て現實の上に實證してゆく宗教たることに於て無比の特色としてゐる。このやうにしてあらゆるものには固定したる實體はない。すべては條件によつて起るのみであつて絶えず變化してやまず、そのものとしては空である。我れにもわが實體はない。かくの如く一切事物の本性に徹することに依て、生死の迷妄を解脱しわが眞實の内容を豊かに開展しいだすもの、それが佛である。——これが佛教の根本原理である。この原理に矛盾しては、もはや、眞の佛教とは云はれない。

しかるに、淨土教は、西方に淨土なるものが實在し、そこに永遠なる阿彌陀佛がいまして、人死すれば靈魂は存続して、其處へ行つて救済にあづかり他力によつて佛となると説く。はなはだ、この原理に矛盾するものである。

それ故、おそらく之れは、後世にいたつて印度教あたりから移入されたものか、或は佛教の正道に堪え得ざる劣弱なる人々のために誘導の手段として考へ出されたものか、

いづれかであらう。尤も、今日の淨土教には佛教の原理とうまく接合した部分もあるから、あながち急に捨てるには及ばないけれど、とにかく傍流であるから、絶えず本流の理知の中でこれを洗淨し、その中に解消せしめて行かねばならぬ。即ち一時はこの様に信じて、やがてはこれを超えて眞の理性の中へと歸つてゆかねばならぬ——と、このやうに淨土教を疑惑するのである。

このやうな考へは、佛教思想家の中に、かなり廣くかつ根深くゆきわたつており、淨土系統の學者の中においてすらも、内心ひそかにこの様に考へ、これと如何に自己の信仰とを調和せしむべきか苦慮しておるものが少くない。そしてその極、淨土教の本質を見あやまつたり他のものとすり換へたりする倒錯に陥るものも、屢々生じてゐるのである。それ故この問題を解明することは當面の急務である。

待望の淨土教本質論いよいよ——連載

待望久しかつた眞野正順先生の「淨土教の本質」はいよいよ本號から連載されます。戦後佛教を團が内部に孕み、そしてまた現實動向にあらわれた様々の姿は、今後の佛教の方向を想うとき、その本質的なところから批判し反省されねばならない。こおした現實段階の幅の廣い視野をもたれ、しかも淨土教人として、殊に法然教學の深い思索を藏される先生がいまその抱藏されるところを、連月、それぞれの問題をかゝげて説いて下さることは、我々ひとしく喜びにたえない。佛教の本流としての淨土教に立たうとするものにとつて、或いは他の宗教と對決せねばならないときに、この論稿は必讀の文字である。

のみならず、考へて見ると、このやうな疑惑は、佛教史上、淵源するところ、かなり古いのであつて、無著が攝大乘論に述べた別時意趣の考なぞも、この思想の一の表れに外ならない。これに對する唐の善導大師の力戰奮闘のあとを示すドキュメントこそあの名著四帖疏に外ならないのである。それ故、これは淨土信仰者にとつて、云はば歴史的に課せられた課題であり、一度は必ずくぐらねばならぬ關門でもあるのである。

それゆゑ、私は此問題を手がかりとし、これを教理史的に分析してゆく事によつて、淨土教の本質を明にし、その立場によつて、法然上人の獨自なる意義を明にして見たいと思ふ。そうして更に許さるべくば淨土信仰が將來において發展すべき方向とその構想を述べて見たいと思ふ。(以下敬語を略する)。



賭

佐藤賢順

パスカルが信仰に入る道を賭（かけ）に譬へて、巧みな説き方をしたことは周く知られている。パスカルは今

から三百年も前のフランスの人で、優れた自然科学者であるとともに、たぐい稀なる基督者であつた。その人の賭の譬喩というのは、神が有るかないかという論證を理性に期待しても、得られるはずはない。結局、神の信仰は理性を捨てて、神の方へ賭けをすることである、というのである。表が出るか裏が出るか、「神有り」といふ表の方を取つて、損得を計つてみよう。もし勝つたら、君は全てを得るのだ。負けても、何も失いはしない。だから、躊躇せずに、神有りという方に賭けたまへ——」

これは信仰の深い眞理に觸れた言葉で、宗教の核心を衝いている。法然上人にもこれに似た言葉がある。「往生は一定と思へば一定なり、不定と思へば不定なり。」また、「念佛申さんもの十人あらんに、たとい九人は臨

終あしくして往生せずとも、我一人は決定して往生すべしと思うべし。」

親鸞聖人の次の述懐は賭の譬喩そのままである。「念佛は、まことに淨土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄に落つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずさぶろう。」

こうして賭は近頃、大變神聖化されてしまつて、特に貴いことかなにかのように思われている。私が今、書こうとする賭はそれとは關係のない、もつと現實的な場面である。

春も爛漫な四月の末である。私は、幼くして父を失つた甥や姪達を尋ねてやるために、別府温泉えの長旅をして、そこで數日を過した。そして好晴の一日を選んで、

ひとりバスで別府から五六里先の由布院温泉まで出かけていった。豊後富士と呼ばれている由布岳の美しい姿に憧れていたし、東九州の山間の温泉宿に心惹かれていたのである。峠あたりは山櫻が真盛りで、山肌を美しく装っていた。一軒の大きい温泉宿に入ったら、その三階が丁度由布岳の偉容を真正面から見上げられる地位にあつたので、私はその廊下に椅子を出して、何を考へるでもなくぼんやりとして、半日ほどを由布岳に對つてうつらうつらと過した。そしてまた、もとのバスの發着所まで戻つて歸りのバスを待つことにした。

この温泉街も戦後流行の温泉祭を催していて、街といつてもほんの一區域にしかすぎないが、軒から軒へ高く綱を張り巡ぐらして、紙に書いたお粗末な旗がつり下げであつた。街の空地には、踊り舞臺が出来て、午後になると、舞踊やマンザイが催されると書いたビラが目につく。バスの發着所の周圍には何軒かの露店が出て、食べ物や玩具を賣つていた。その中に、急拵らえの、テーブルの高さくらいの臺を置いて、しきりに客を呼んでいる男がいた。物を賣つているのでないことは、その臺の上に何も品物を置いてないのでわかる。手に三枚のランプを持つてゐるだけで、それを手品師のやうに巧みに、指先を使つて最初はお客の方に見せる。三枚のうち一枚は繪のカードであとの二枚は數字である。その三枚を伏

せて臺の上に並べると、それをまた器用に指先を使つて急速に順序を變える。お客には三枚のうちの一枚の繪のカードの場所を憶えさせておいて、一度、臺の上に伏せて並べて、すぐにその場所を二、三回入れ換へるのである。その速度が初めは、客の視覚が、伏せられた繪札の在り場所を、充分に追いかけることのできるくらい緩慢な速度である。それで、繪札が伏せてあると思う場所へ金を賭けさせて、當れば倍額にして返えし、當らなければ賭けただけ取り上げてしまふという仕組なのである。

近在の青年達が段々と集つてきて、この屋臺を取り圍んだ。ポケットから百圓札を二三枚をつかみ出して賭ける。女も幾人か雜つてくる。買い物籠から金を出して賭ける。初めは必ずお客の方が當つて儲ける。伏せたカードを動かす速度が緩やかで、どれが繪札だか見分けられるからである。が、そのうちに、指先は機織り機のおさのようにすばやく右左に動いて、繪札の在り場所は判らなくなる。しかし二三度、當つて儲けて興奮しているお客たちは、血の臭いを嗅いだ野獸のように、瞳を輝かして獲物に飛びついてゆく。百圓札を握つて見當をつけてカードの前にボンと力強く置くのである。今度ははずれて賭けただけ取られてしまふ。

幾度か、續け様に取りられる。一人の若い女も續いて取らた。女はもう賭ける金が無いとみえて、左腕の腕時計

を外して、思い切りよくボンと賭けた。

「ねえさん、いいのかい？」

賭博屋の男は思い止まらせるように言つた。

「いいのよ」

「幾ら張るの？」

「五百圓！」

繪札だ。女は五百圓受け取つて、笑顔でこの群を離れていつた。続け様に取りられて、おじ氣がついていた男達はこれに氣を取り直して、また賭けた。しかし三度に二度の割合で取られていつた。

私はパスカルの賭の話の思い出しながら、バスを待つ一時間の間に、この一群に對して精密な觀察を行つた。

私も賭ける人達と同じように、賭けてみた。尤も、讀者諸君、早合點をなさつてはいけない。私の賭けたのは現金ではなくて、觀念の札束である。カードがどれほど早く動かされても、一度表を向けて見せられた繪札の在り處を、決して私は見失わなかつた。私の賭ける場所にはいつも繪札があつた。私はいつも當つた。恐らく私は、もし實際に賭けたとしたら數千金を儲けていたと思う。屋臺を圍んだ群の中に子供が二三人いた。子供は金を持つていなかつたから、賭けはしなかつたが、はしやいでしきりに大人に教えてやつていた。

「おじさん、そこじやないよ、こつちだよ。」と言つて教へてやるのが、よく當つた。賭博屋はその度に、「餘計なことを言うな、」と叱つて、子供を追い拂つたが、子供の言う通りに張つた人は、よく當つた。

私のその時の觀察の報告はこうである——人間の欲望はいかに、正しい物の見方を曇らすか。欲に驅られると目が闇んで物の真相が見えなくなる。判るはずの繪札の在りかが、私にも子供にも判つてゐるのに、欲に驅られて金を張つてゐる人達には見えなくなつてゐるのだ。

やがて持つてゐるだけの金を召し上げられると、青年達は、空っぽになつたポケットへ手を突つ込んで、てれ臭さそうにここを離れていつた。お客が去ると暫らくの休憩である。みると七八間先にも同じ賭博屋が店を開いて、しきりにお客から絞り上げていた。この邊陲の溫泉街へ入り込んで、純情の青年達を虫食つてゆく連中に、私は深い憎惡を感じずにはいられなかつた。

バスが來た。別府へ歸える終バスである。いつの間にか、賭博屋のおやじは臺を疊んで小脇に抱えて、二人ともバスに乗る仕度をしてゐた。若い女が一人現れて、この二人と話している。見たことのある女だと思つたら、そのはずである、さつき腕時計をはづして、ボンと賭けた威勢のいい女だつた。

現實の賭には、かくの如く惡辣な仕掛がある。

新 た な る 自 覺

人にすぎたる往生のあだはなし——法然上人

文學博士 大 野 法 道

一

終戦後はやくも五年目の新年を迎へることゝなつた。戦後の經營いまだとゝのはず、衣食住のこととも心にまかせず。何かにつけて己前のことを思ひだし、高くなつた物の値段に、今さらながら驚いて、すぎ去つた昔の事をすぐ引き合ひに言ひ出したりして、變りも變つた世の中に、軌道に乗らぬ不安定をかこつ中にも、人々の生活が納得のゆく心で駁々として進められてゆく日の來ることを、ひたすらに待ちまうけてゐる。

日本は、この國が永らく歩みつゞけてきた歴史にかんがみて、時代々々に新たなる出發をしてゐる。そしてこの度の出發は未だ會て見たことのない程、大きい轉換の意味をもつてゐる。それはこの國を基本に考へることから脱却して、まづ世界の中に自らを見るものであり、人々は人類の一員としての自らを知るものであつて、會て見たやうに、國內に發生した問題の解決であつたり、都を遷して人々の心氣を轉じたり、ある階級に政權が移つ

たり、鎖國の夢が破れて見渡す世界が廣くなつたりしたのとは、全く性質が異つてゐるからである。本當に大變な、しかも敗戦の終幕の下ろされた戦争を通過したことから、かへつてころした人間のまさに立つべき所に、立ち歸ることができるやうになつたことを、思はざるを得ないのである。

二

突如として開き出された新たなる出發に、人々の足なみが揃うのは、容易なことではないであらう。國法の本としての憲法は既に改められたが、國家の機構の變化は、すべて新規にやり直されるのでまだくゝの觀があり社會の情勢となればそう急にはゆかず、世界に於けるこの國の位置とゝもに、人々の心の動向につれて、徐々に變つてゆくであらう。今では從來あり來つたこのうちで若い心の目ざはりになる段階のやうなものを、たゞわけもなく封建的として投げてしまふ傾きがある。去年の暮

に放送局が、「こゝにも封建的なものが残つてゐる」という題目で、京都方面の寺院を訪づれて、僧界の情勢を送してゐた。勿論そこには多くの改めらるべき部面があるであらうが、永年の社會情勢に據つて組織されてゐるからには、傳燈に意義をもつ宗教本來の面目と相俟つてそこには侵しがたき眞實のひそむことを思はねばならぬ。

機構の改革や情勢の變化は、すべて世に現はれる形相である。形相は動かすべからざる實際の事實であり、この國が自らを形造る面容として、いつはりなき如實の姿であるから、人々のつとめがこゝに集中し、力のこもつた勵みが、これを目標に進めらるべきであることは明らかである。がしかし、再建日本を背負うた人々の目じるしは、唯それだけのものであらうか。

何よりも自己そのものを本當に築くことを先決とするそれにはわが本心が、まさにあるべき處に落付かねばならない。はげしく移る世の變動に奪はれる心から突き進んで、大らかに人類の營みに參與して、われ一人の役割を果すべき位置にあるとの知覺、せめてわが身の及ぶかぎりの、能率を上げずには濟まされぬ決意、こゝに我々の本心の落付き場所があると思ふ。

三

淨土門は佛の世界である淨土を懷いて生きる道である。佛は無上正覺者であり、これ已上のものゝあり得ない正しい覺りを成就なされたのであるが、何が無上とされるものであるかは、凡夫の知りうる限りでないと敬遠したのでは、煙の中へ追ひ込められた形で、ます／＼分

らなくなるから、各自の心にまかせて、人間本心に納得できる最後の安定場所をつきとめる必要があるが、今日に於ては前記のやうな自覺がそれであると言つて然るべきではないであらうか。

無上正覺の成就された世界——淨土を懷くは、人間本心の喚び起された自覺ある者に於て意義あることであるがこゝで問題になるのは、この自覺がその人に於てどこまで本當のものであるかである。心でも思ひ、言葉にも出して語るにしても、果して當人が、それに全身的になりきつてゐるかは疑問であるのではないか。大きく立派なことを言ひだして、そこに本心を据えたとしても、しからぬ間に、それが身につかね装ひとなつてしまつてゐるこれが人間ではないであらうか。

法然上人の言葉、

虚假（こけ）とて、かざる心にて申す念佛が往生はせぬなり。……言ふかひなき幼なきもの、もしは畜生などに向ひては、かざる心はなけれども、とも同行はいふに及ばず、その外つねになれ見る妻子眷屬なれども東西をわきまふるほどの者になりぬれば、それがために、必ずかざる心はおこるなり。

人の中に住まんには、その心なき凡夫はあるべからず。すべて親しきも疎きも貴きも賤しきも、人にすぎたる往生のあだはなし。

人間には、本心かくす虚飾はどこまでもついて廻る、との實證である。本心を裏切る永遠の虚飾を見失ふことなき、日に新たなる自覺あるところ、喚び起された本心はどよみなく、見定めた安定場所にすこやかに生きてゐる。

義 談 た る か

讓 尾 寺

張りのある朗々とした一種の節をもつてよみあげてゆく聲が、若い人たちの兩側に分れての對陣の華やかな部屋の中に響いてゆく。

サツとすばやくとぶ白い指、賑やかな空氣の中に桃割れのかんざしがゆらぎ光る。明治大正期の正月風景の一は、かるた會が代表した。金色夜叉の、お宮と貫一のもつれの發端もかるた會であつた。

いまならダンスパーティーか麻雀かであろうが、かるた會もぼつぼつ復活して來ているのだらう。麻雀といえばあれもカルタの一種である。かるたと云えば百人一首と考えるのは勿論早計乍ら、そもかるたとはということからお談義は始まる。

カルタ・キヤルト・カード、とにかく札に違いない。骨牌などと書けば麻雀牌など代表的カルトで

ある。いまから四百年程前日本は西歐の、ポルトガル・オランダと相次いで海彼岸の國の商舶を迎えた。カルタはそおして傳つて來ると共に、何時の世にも賽の目に運命を託して悔いない人間の賭博心理が之をすばやく受け取つたのである。カルタという言葉そのものが、加留多と書こうが、歌留多とあてようが、異國渡來のものであるに間違ひはない。ウンスンカルタとか天正カルタとか呼ばれたものは、だからその遊び方も今では分明ではないが、決して古風な百人一首如きではなく、ランプに近かつたであらう。丁髷の人たちにとつて洋劍・カップ・騎士など洋風の畫を畫いた四十八枚のカルタを闘わせることは、最も斬新な異國趣味でもあつた。貞徳の句に「かるたの友ぞ見ねば戀しき」とあるほどの熱の上げようも現われ、「博奕カルタ勝負御停止」の制禁令が出るほどの流行でもあつた。西歐異邦の遊びの中に、息づまるような封建社會からの解放を夢みて、カードを投げたものがないとはいえない。

しかしまた聖母マリヤが子育觀音に變身したのとは理由を異にするにせよ、四十八枚の遊戲境を佛教にことよせて墮獄の罪を逃れようとした方向も面白い「まず四十八枚は彌陀の四十八願なり——びんよりきりまでの十二と定めし數は十二月を現わしたり」という如き。狂言綺語も讀佛乘の縁と古くいゝならわし説ききかせてきたこと故、時は變ればカルタの勝ち負けもまた因縁所生というわけあいでもあらう。「びんからきり」とは、今も使いなれる

言葉ながら、びんが一であり、きりが終りという、この異國傳來の言葉は、カルタ遊びの風は變つても、しみついて廿世紀の今日まで綿々傳わるとは、きりのない話なり。

百人一首のような歌かるたの系譜は、また別のところにある。平安朝の貴族に流行した「物合せ」その中の「貝合せ」から轉々傳つてきている。當りまえのこと乍ら、異なる貝殻は合わさらず、貞女は兩夫にあわずという倫理觀さえ加わつての「貝合せ」その貝も美しい彩色に、歌を上下に分けて書くなど、衣裳をこらした贅澤な道具立ては申すまでもない。ところが貝を合せる競技からむしろ歌の上下の句を合わせることえへ變化してくると、敢て貝殻でなくとも用たりて、歌貝から、木牌、紙牌となつてゆく。現在のような形におちついて來たのが近世、江戸も中頃とか。歌かるたが、貝からカードへと、その間にさきの異邦のカルタが強く影響したことも想うに難くはない。

子供も知る、いろはかるたが創案されたのもそう古くはなく、「一寸先は暗」——「二を聞いて十を知る」といつた「い」が「犬も歩けば」の江戸風に統一されていつたのにも、「いろは」の歴史がある。かるた談義も、あまりかるたをまき散らすと、きりがつかないことにもなる故、こゝらで筆を擱くとするが、とかくこおしたカードの歴史は賭博に結びつき易い。しかし、賭博とは、人間に約束されたものではなく、唯運命に約束された勝負なのである。してみれば、遊びズバリを離れて、賭博へゆくものは、人間喪失という他はない。

佛青めぐり一

——早稻田大學佛教青年會——

知識青年層の間に非常に哲學書がよまれるという理由の一は、たしかに哲學が現代では宗教の代りをしていてということだ。既成教團のもつものは好まない——が宗教は求める。いまの思想的青年にはこの氣持が強いとおもう。各大學の佛教青年會の存在——從つて佛教大學をも含めて佛教學生連盟の結合と活動とはその意味で注目されてよい。

早稻田の森に佛青が生れたのは明治十九年、實に古い。而もワセダ生みの親・育ての父小野梓氏の創立というから歴史は輝かしい。しかし現在から將來へ、を約束するものは誰か。いま伊藤康安教授を中心に卅名位の會員が、近代知性人の求道の歩みを堅實に進めている。毎月例會は教授の金剛經講座が續けられ、その他・研究會・圓覺寺の學生接心・和教會日曜講話などえの參聽——擁みない眞摯さは一筋の深みを目指してゆく。

學生運動の盛んな學園で宗教的良識に立つ佛青メンバーの動きは小粒乍らピリツと異彩を放っている。大體いわゆる佛教人でないことが、會の性格を既成的なものに捉われない純粹さ、若い積極さが會を活動させている。東京驛・新宿驛頭での傳道にもそれを感じる。それだけに現在の佛教大學の諸君への批判も鋭い。かつて明治期に於ける居士佛教の活動を想うとき歴史あるこおした佛青の成長が期待される。



正月つれづれ

竹 中 信 常

子供等に「お正月には何をするの」ときけば、必らず「おもちをたべて羽根をついて、……」と答える。又、クリスマス・ツリーが西洋の年末を代表するが如く、門松は日本の新年をシンボライズする。戦争中には、とうとう四寸幅位の印刷した紙片にまでなりさがつたにしても、とに角空襲下のわが家の門の

両側には、紙の門松が飾られたものである。又夏目漱石の猫ならずとも、正月の餅はノドへつめてもたべたいのが人情である。舊年を除夜の鐘で送り、新しい年を門松と餅とで迎えるのが、何百年來、日本人が行つて來た年中行事の第一歩であつた。ところが何によらず、一定の法則、又はしきたりには例外というものが必ずつく、正月にも、門松と餅という不可分の關連についても又例外が存在するものである。私達が門松を立て、餅

をたべて正月を祝つてゐるのをよそに、門松も立てず、餅もつかず、正月を送る人々が日本のあるところにある事に、民俗の面白さ慣習の根強さを見るのである。

◇

門松の來歴、起源については考證史家にまかせるとして、俗説には、延久・承保(西曆一四六九——一〇七六)頃には弘く一般の民家にて、正月の祝事として立てていたようである。(古今要稿卷四四)又、これは必らずしも松に限つたことなく、櫛やしきびを用いたこともあつた。要するに、松などの常緑樹にて千年の壽命を表わすものをもつて、正月のめでたさにちなんで立てるに至つたものといわれる。それだから、これに竹を添えるのも「竹はよろづ代を限る草木一なるが故とされ

る。

このように、めでたくかぐわしい松や竹を立てずにすこす正月は、われわれにとつて此上なく味氣ないものとなるだろうが、兵庫縣有馬郡八多村の中小名田という所では、門松はおろか、注連飾りもせず、雑煮も炊かぬ正月を送る。阿波の名西郡、籃畑村字第十のあ

る一軒の舊家では、門松の代りに庭先の惠方に尖つた棒をたて、その裾に横に割薪をくくりつけ、これに割箸を十一本、閏年なれば十三本くくりつける。その他、壹岐の島の青ヶ浦部落でも、門松を立てぬ風習がのこつてゐる。

現代の感覺からすれば、正月はすべてが新しくなり、古い曆もかけ代えられ、すべてを第一歩からはちめる「一年の計は元旦にあり」などという、いわば再出發の門出という意味で、何となくもの新しく、めでたく感ずるだけである。ところが、日本の古來の信仰からいへば、何も正月が一月の一日という一づくめのスタート・ポイントだからめでたいのではなく、それは神が人界におりて來て、人間とひとときの團らんをするが故にめでたいの

である。斯る神降臨の時期は年に數回あり、それを節季といつて、何等かの行事を行い、又何によらず季節のものを供えて、降り來つた神をもてなす處から、節供という語も生れ出たわけである。節供といへば現在では「桃の節句」「端午の節句」丈けと思われがちだが、これ丈けに限つたものではなく、二月の初午も、七月の七夕も、八月の盆も、すべてが季節又は月の代り目に際して行われた行事の名残りである。されば正月も又、一年の始めの節季という意味で、神が人界を訪れる時期であり、殊にそれが年の始め丈けにそれに附隨する行事なり、感覺なりが強く作用して今日のような正月行事が生まれて來たのである。

それにしても、神様は何も用意のない平地にぽつかりと降りて來るわけではなく、何かよい所を求めて、そこに降臨する。そのよりどころとなり、しるしとなるものが門松であり、その近邊は神聖にして犯すべからずとして注連縄で區劃される。神社には神木といつて、一番の老樹、大木に注連をはつてあるのが一般であるが、これなど正しく神降臨の目じるしであり、もつと具體的にいへば、此木

を傳つて神様が天から降りて來るとのいわれがつたえられてゐる。正月の神は、門に立てられた松を傳つて天より降りて來て、それぞれの家の者と新年の語らいをし、食事を共にする。門松の意味をこのようにせんさくして見ると、門松を立てぬ風習にも相應の理由の存することが分るのである。壹岐の島の或る舊家では、昔、大晦日の夜、春の用意をしてゐる最中神が降臨されたもので、そのままお迎えをした。爾來その家では門松も立てず、お飾りもせず正月をすごすとのことである。神がおいでになる目じるしのための門松なのだ、目じるしを立てぬ前に神がおいでになるのだつたら、今更そんなものは不用だ、ということになる。そのような功利的な意識はないにせよ、とに角、正月につきものの門松にも、さぐれば興味のある民俗がまつわつてゐることが分る。

◇

餅の起源は、昔のように諸事不便な時代に於いて、保存がきき、携帯に便利で、滋養にとんでゐるものという、實際的な要求にあるらしい。モチは元「モチイ」更には「モチイ」と呼ばれ、「モチ」は持つ、又は保つを意

味し、イイは飯即ち食物と解して大過ないと思う。正月嚴寒の食料の乏しい折、カロリーの多い餅をたべて、新しい年のエネルギーを充分に蓄えようとすることは近代的な感覺からでも割り出せる理くつである。

われわれの正月から餅を抜かしたら、随分わびしいものになつてしまふ。乏しい配給の中をやりくりして、せめて一切れでも澤山にと苦心するのが、年末の主婦のつとめとなつてゐるほどだ。ところが、このようなやりくりを尻目に、餅などは先祖傳來御無用という至つて當世むきの人々が、日本の各地に可成り澤山ゐるようだ。その二三を擧げてみると壹岐の島、周防の大島、宇都宮市西北の戸室山附近、千葉縣東葛飾郡木間ヶ瀬村及び風早村、南紀伊の川中村一帯等々である。

その理由はまちまちであるが、いづれももつともらしい傳説がついてゐる。宇都宮市西北の戸室山附近に例をとると、昔、弘法大師が此山に一晚のうちに百穴掘らうとして、九十九まで掘つた處が、その夜がたままた大晦日だつたので、早起の一軒が起き出して餅をつき始めたので、夜が明けてしまつたと思われて、残念乍ら穴掘りをやめたが、此地を去るに際して、大師は「此附近の者はこれから

正月元旦に餅をついてはならぬ。もしこれにそむくと必らず祟りがあるぞ」といい置いたとて、元旦には餅の代りに赤飯を炊き、餅は正月十四日になつてつく事になつたというのである。或は、武士が大晦日に下男を無禮打ちにしたところ、つきかけていた餅に血がとび、臼を代えてついても血がにじんで来るので、正月に餅をつくのをやめたとか、等々の話がまつわりついている。

このような物語を一つ一つ丹念に集めて研究する事も面白いにちがいないが、さし當つて問題になるのは、何故、よそでは皆餅をつくの、特定の村、特定の家でそれをしていないのかということである。

その前に、「餅」そのものについて考えると上述したように餅は非常に貴重な食物である。それ故、上代の人々はこれをまず神に供え、又神の「よりしろ」即ち神が降りて来るよりどころとし、神前で一つの餅を引合うことを福引といつて、めでたいことともしているほどである。昔は、一年の運勢をためす意味で餅を的にして弓を引いたこともある。このように、餅そのものに既に宗教的意味が強いところから、壹岐の國では、元旦に家人一同膳に向つて雑煮を祝う間、器物の音を立て

たりものをこぼしたりすることを非常に忌みきわめて嚴肅な態度を守る。従つて豊後風土記にも見られるように、いたづらに餅を的に弓を射たところが、その餅が白鳥に化して飛び去つたというような、神變説話も生れて来る。

餅にまつわる「宗教的意味」はこれくらいにして、それなら何故、或る限られたもののみが餅をつかぬ正月をするのか。これについては色々の説も出ようが、その一つとし、前に門松の處でいつたように、正月というのの一つの節季であり、神の來臨したまう時期の一つである。そのために、その前後は身を清め、靜肅にして、なるべく立ちさわがぬようにせねばならぬ。ところが世が移り、時代が至るにつれて、仲々にこのようなことは守られにくくなり、ごく律氣な、昔かたぎの家や村を除いては、逆に大晦日の夜から元旦にかけて、一年の總じまいだとはかり、バタバタと立働くことが一般となり、しづかに、ちつと正月の神のおいでを待つことの方が珍らしく感ぜられるようになって來た。そして、も

との意味が忘れられて、逆にこのような餅なしの正月に、もつともらしい理由をつけるために生れたのが、先に擧げた弘法大師の傳説

その他様々の物語りとなつたのである。



風俗とか慣習とかいうものは、理窟とか實用とかとはかけはなれた場合が多く、それ故一見したところまことにくだらないと思われるものも多い。然し、その背後には、そしてその眞意としては、むしろ吾々の表面しか理解せぬような常識をはるかに越えた、深く遠いもののあることをしみじみと感じさせる場合が少くないのである。我家の門口を飾る門松の陰にも、一家揃つて祝う雑煮の餅の一片にも、日本古來のなつかしく、思い出多い夢が漂つてゐるものである。

中村 辨康 著

法然上人とその信仰

菊半截 八〇頁

定價三十圓(〒)五圓

來出版再

現代の要望に答えた名篇、傳道に、座右に即時御申込みを乞う。

發行所 東京都港區芝公園五ノ十

法然上人鑽仰會

振替東京八三一八七

芝園たより

◇新年おめでとう、とまづ御挨拶
さて本誌新春の颯爽たるスタート
振り御期待にそむかぬものと些か
自讃、この調子で本年は堂々誌界
を闊歩してゆくつもり。

◇鈴木・宇野兩先生の御高論は淨
土を慕い佛教を想うものにとつて
貴重の文字、眞野・大野兩先生の
玉稿とともにまことに感銘ふかい
ものがあると存じます。お忙しい
中を御執筆頂けましたことを心か
ら御禮申し上げます。

◇飛躍の年・發展の年、通勤の靴
に、家庭の爐邊に、淨土は皆さん
の心の友としてつねによりそつて
行きます。全國會友の一層の協力
とお勧めをお願いする。

人もわれも共に伸びゆく生命ぞと
かたみに寄れば明るき世の中この
氣持でお互明るく伸びませう。

◇御覽のとおりの特大號、従つて
定價も例月の倍となりましたが之
でギリギリの處。豫約拂込の方は
今月は二ヶ月分として清算いたし

ますから御諒承下さい。編集部は
早くも二月號の新企劃に張り切つ
ています。(藤田)

◎浦島太郎は三十年の月日を海の
底で三日のうちにすごしてしまつ
た。われわれは淨土五ヶ月の苦勞
を、一ヶ月半で経験した。

西田哲學のことはよく判らぬが
ここ數號の淨土は、まさしく非連
續の連續を實踐したわけで「なせ
ばなる、なさねばならぬ」ことを
しみじみ體認した。

◎いままでは「書く」の方の側に
いて勝手なことをいつていたが、
淨土をやるようになって、はじめ
て「書いて貰う」ことの、むづか
しさを感じた。今年は「書いて貰
う」ことを大いに勉強するつもり
である。(竹中)

◎最近の出版界の特異の傾向は、
新興雑誌の凋落ということにある
一般にはそれが經濟的な理由であ
り、購買力の低下ということで片
づけているが、眞因はもつと深い
ところにある。思想の主動性・一

貫性・向上性、この三つの調和が
破れると、きしみが出て來て、つ
いには落伍する破目に陥るのでは
なからうか。

淨土信仰という一貫性を包んで
常に時代思想に對してイニシアチ
ーブをとり乍ら、上に向つて進ん
で行く。これがわれわれのモット
ーである。

◎一體、今までの佛教雑誌とか宗
教雑誌といわれるものは、餘りに
も純粹な思想のみを扱つてばかり
いたようだ。水のように、味も匂
いもない。ところが、眞實の信仰
とか思想とかは生きてゐるのだ
理窟やお説教では間に合はない。
世界は一つか二つか、原子爆彈を
どうすべきか、帝銀犯人は往生が
出来るか、町にはんらんする靈媒
や巫女のいうように靈は實在する
のか、といった現實問題に對する
解答が必要である。これに答えて
こそ、本當の意味のダイジェスト
即ち案内者というものであるう。

(松濤)

「淨土」 一月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿三年十二月二十日印刷

昭和廿四年 一月 一日發行

(特價二十圓)

東京都港區芝公園五ノ一〇

編輯兼
發行人 眞野 正 順

東京都千代田區神田神保町三ノ十

印刷人 春山 治部左衛門

東京都千代田區神田神保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都千代田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都港區芝公園五ノ一〇

振替 東京 八二一八七番

會費番號 B 一〇八〇一四

會費
一ヶ年 概算金百五十圓

(送料共)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回）日發行
昭和二十三年十二月廿日印刷 昭和二十四年一月二日發行

第十五卷 第一號

特價金二十圓（送料二圓）